

## 1976 年マース・カニンガム来日公演再考―「総合」から「肉体」へ―

三宅香菜子（國學院大學大学院）

本発表では、1976 年マース・カニンガム来日公演が日本でいかに受容されたかの再検討を当時の公演批評の分析を通して行う。

一度目の来日にあたる 1964 年公演に関して発表者は、第 69 回美学会全国大会若手研究者フォーラム（2018 年）での発表をもとに、『舞踊學』第 47 号（2024 年）に研究成果を発表し、当時の日本の前衛芸術批評で重視された「総合」がカニンガム受容に際しても重要なキーワードだったことを明らかにした。音楽家・批評家の秋山邦晴およびカニンガムを招聘した草月アートセンターが掲げた「総合」はワーグナー的な総合芸術ではなく、その意味は各批評家によって微妙に異なるが、複数の芸術ジャンルが融合しないままに舞台上に提示されるという意味では共通点が見られる。

発表者はさらに、第 71 回舞踊学会全国大会（2019 年）において、1970 年代にカニンガムが日本でいかに受容されたかについて、1964 年来日公演批評との比較を通して検討した。ただし、1964 年と 76 年の時代思潮の違いや批評の背景を精査することが課題として残った。特に、土方巽体験に由来する市川雅の「肉体論」が、カニンガム受容にいかに影響があったのか、市川以外の他の批評家の語りにも作用したのかを中心に考察を加えたい。76 年来日公演とともに、前年 1975 年に開催されたポスト・モダンダンスの公演「ダンス・トゥーデイ・'75」の紹介記事等にもその影響が及んでいる点にも注目し、前回の発表では未出の佐藤滋らによる批評文を掘り下げて詳細を明らかにする。

1964 年公演は 60 年代の特殊な「総合論」をもとにカニンガムが受容されたのに対して、76 年公演では、「ダンス・トゥーデイ'75」に際しても用いられた「肉体」に着目する視点が見られる。舞踊・音楽・美術の相互独立性が「対決」よりも融和に近づき、洗練を増したカニンガムの舞踊が他の若いダンサーから突出して捉えられていたと推測される。批評の変化には、カニンガム作品や舞踊団のメンバーの変化が影響していたと考えられるが、同時に、1960 年代後半から 70 年代の日本における批評の文脈の推移、60 年代の「総合」の捉え方の変化や身体観の変化が 76 年来日公演受容に影響した可能性の再検討が求められる。